

現在、当院の青年期外来には、コロナ禍をきっかけに受診に至ったという患者さんがたくさんいます。さまざまな悩みや症状を抱えながらも、これまで何とか学校や職場に行っていたのに行けなくなったり、あるいは彼らを何とか支えていた家族が心理的にも経済的にも追い詰められ、支えることが困難になった……というようなケースです。コロナによって、これまで隠れていた問題が顕在化した、もしくは顕在化の時期が早まった印象を抱いています。

慈恵病院青年期外来 鷺田 健二医師

（地域連携副部長兼病棟医長）

■弱まった安心基地

現代社会においては対人関係が希薄になり、人々の孤立の度合いが深まっています。家族と一緒に暮らし、学校や職場に行っている人も、人とのつながりが薄い、あるいはつながっていない子どもや青年が増えているように思います。互いを支えるネットワークや地域共同体も力を弱め、核家族が増え、大人たちにも子どもや青年を支えるゆとりがない場合もあります。以前は親や学校の先生、友

うえにコロナ禍です。子どもたちの安心や安全は大きく揺らいでいます。

■温もり、手触り

心から安心できる時間と場所は誰にとっても必要です。それらを失った時に心のバランスをどうやって保っているのかというと、バーチャルな世界がその一つかもしれません。

青年期外来を訪れるコロナ禍の子どもたちは、大人以上に自粛を強いられ、修学旅行や部活動などたくさんの楽しみを失いました。そのような中で、ネッ

■安心・安全感というのは身体的な接触や距離感、現実の対人関係を通じて育まれていくものだと思っています。これはバーチャルな世界を否定するものではありません。今後も発達していくバーチャルな世界で学ぶことも多いと思います。大切なのはそのバランスです。

現実的な社会の中で少しずつ楽しいことや面白いと感じられるものが増え、バーチャルな世界での滞在時間は相対的に減ってくるように思います。そ

とをしてみたいのか」。そういったことを子どもたちと一緒に、地道に探していくことが私たちの仕事なのです。

■コロナ禍の大人の役割

昨今、不登校・自殺率・虐待件数全てにおいて増加傾向にあります。これらにコロナがどの程度影響しているのかは、もう少し時間がたってみないと分かりません。

そのような厳しい状況の中で、私たち大人も、ささやかであっても「楽しい」を見つけ、何とか必死に生きていく、厳しいけれど、どうすればこの世の中と折り合いを付け、「つらい」こともあるけれど悪いことばかりではないし、「楽しい」こともある」と思えるものにしていくのか。それを子どもたちに見てもらうことが大切なのかもしれません。私たち大人が人生に悲観していると、それを見ている子どもたちはこれからの人生に希望を見いだせなくなってしまう。

若者

「楽しい」一緒に探す

人以外に、親身になってくれたり何気なく声をかけてくれるような「斜めの関係」がありました。家でも学校でもない中間的な安心基地のような存在です。それが減っている

トやゲームにのめり込んでいる子どもたちに出会いますが、彼らはどこかで現実の温もりや手触りも同時に求めているように

これは子どもや青年たちが現実社会の中に楽しみや面白さを見つけた始めたからではないでしょう。

実は、私たちが携わっている精神科臨床というのは、子どもや青年たちにとって楽しいものの、面白いと感じられるもの、やってみたいものを一緒に探すことなのです。何か特別な助言をしたり、事態が急に好転するような薬はありません。

「君はどんなことに楽しみを感じるのか」「どんなことに向いているのか」「将来どんなこ



わしだ・けんじ 東海大学医学部卒業。川崎医科大学附属病院、慈恵病院に勤務。医学博士取得後、英国ロンドン大学精神医学研究所に客員研究員として留学。その後、川崎医科大学精神科学教室講師を経て、再び慈恵病院に勤務し、現在に至る。日本精神神経学会（専門医、指導医）、日本児童青年精神医学会、日本青年期精神療法学会（理事）などに所属。

私たち青年期外来のスタッフは子どもや青年たちに「毎日を楽しくしてほしい」と願っています。私たちと一緒に生きがいや、楽しみを見つけ、今の生活が少しでも良いものになるよう支援をしています。

持つて相談に来たにもかかわらず、私たちが何度も聞き直しているのと彼らの話す意欲がそがれたりします。コロナ禍によって、彼らのわずかな兆候を十分にキャッチできていないのではと懸念しています。